

“Heart to Heart”

第5巻 第1号 (No.14)

発行日 平成22年7月10日

心から心へ わかちあう あたたかさ

目次:

サッカーW杯に思ったこと	1
コラム：テレビマンの育児日記(1)「受容って何だ？」	2
療育プログラムのようす	2/3
自立した生活及び地域社会に受け入れられること	4
ご案内	4

サッカーW杯に思ったこと

今回は少し子どもたちから離れた話になりますが、W杯における6月の日本サッカーチームの活躍は、むし暑い梅雨を一時忘れさせてくれるかのようでした。滅多にテレビ観戦もしない私ですが、選手たちの決死と言える戦いぶりが、さらには敗戦後の反響が、私の心を十分に揺さぶってくれました。

ここでは海外の反響について記してみます。中国メディアの記事で「日本代表の選手たちは、試合後必死に涙をこらえながら、応援のために会場に駆けつけたサポーターに感謝のお礼をした。その瞬間、日本サッカーの魂と意志を感じ取ることができ、心が震えるのを感じた」とありました。台湾の方は「あなたたちの活躍は忘れない。あなたたちのスポーツ精神に心から感動した。素晴らしいゲームをありがとう。“決してあきらめてはいけない”ということを教えてくれてありがとう！」と熱く語っています。またフランス人の記事紹介では日本人サポーターについて取り上げていました。敗戦の後の彼らは笑顔でさばさばとして周囲を幸せな気持ちにさせる雰囲気だったこと、彼らから聞かれた言葉は憤りではなく「この試合を見ただけで来た価値があった」などの類だったこと、また98年のフランス大会で、試合観戦後に持参した袋にゴミを拾って観戦席をきれいにしてから退場する日本人サポーターの姿が、フランス人に衝撃を与えたことも紹介されていました。

ワールドサッカー大会は当然自分の国が勝つことが最大の目標です。また同じアジア地域の人たちが日本を応援し、勝利を喜ぶというも頷けます。しかし私が本当にうれしく思うのは、この大舞台で示した日本の人たちの深い精神に、勝ち負けを超えて感動した人たちがいるということです。選手らが応援席に頭を下げている姿に、万感の思いをもつ。その勇気ある戦いぶりに、あきらめてはいけ

武蔵野東教育センター所長 長内博雄

ないと心打たれた人がいる。観戦のために現地入りした日本人サポーターまでが、彼らにしてみればごく自然な言動で他国の人に衝撃を与えたりしている。私のみならず、こんな話題に心弾む感情を抱く人は多いのではないのでしょうか。日本人の根底を流れる精神性には、世界の人々に影響を与えるすばらしい個性があると私は思っています。その輝く精神性を彼らはW杯で示してくれました。

私たちの日常の中でさえも、目を見開くような驚きや感動、発見や願いなどに熱くあるいはすがすがしく心を動かす瞬間は、目に見えないエネルギーが渦巻いて人の心の世界を変え創造していくのではなかるうかと感じます。それは他の人からの刺激であったり、努力の末の瞬間であったり、自然と対峙する環境の中であったりとさまざまでしょう。しかし私たちが意識するならば、そうした瞬間はいつでもどこにでも口をあけて待っていているはずです。あらゆる職場の環境、家庭生活、スポーツやハイキング、さまざまな趣味、またそこに集う人たちの交流の場などすべて、それぞれが新たな明日を生み出す可能性を秘めた時空間ではないのでしょうか。他に多くを学んだり、感動し感謝の念を抱いたりする人は、きっと他の人たちにも何かを感じさせ、刺激を与えている人であるに違いないのです。

さて私たちの子育ての場も、どの環境にも負けないほどの刺激とエネルギーに満ちています。そして常に何かを学び互いに何かを与え合っている場でもあります。純粋でエネルギー的な子どもたちとの心通わす環境は、かけがえのない創造の場と言えるでしょう。まもなく夏休みを迎えますが、ぜひこの一夏をお子さんのよい経験学習の時ととらえていただきたいと思います。そして保護者の皆さんもどうぞ意識してリフレッシュを心がけ、健康的に過ごして下さることを祈ります。



今年の七夕も夢であふれています



コラム テレビマンの育児日記(1)

「受容って何だ？」

娘が生まれたのは今から23年前、自閉症とわかったのは2歳の時でした。その後、成長するにつれて、私たち両親に「悩み」が生まれました。それは、しつづけるとき、どこまで強くしかっていいのかということです。当時読んだ本に「受容が大切」という言葉がありました。強く叱るより、自閉症の子どもの行動を規制せず、言い方はよくないですが、まずは放任し、誘導するように社会性を身につけさせていく考え方です。おしりをたたくなどもってのほか。「スパルタ教育」などは、自閉の子のパニックを引き起こすだけで、百害あって一利なし。そして、自閉症の子が暮らしやすい社会こそ、優先されて作られるべきだとします。

娘が幼稚園にあがるころ、私たち夫婦は、この方法を実践しているある施設を見学に行き、実は、少し考え込んでしまいました。その子たちはやりたい放題。確かにのびのびとはしていますが、社会の常識とは大きくずれ、このままでは

とても社会生活などできないように見えました。誤解を恐れずいうと、わがママを容認し、悪いのは社会のほうだと開き直っているようにすら感じました。理屈は確かにわかります。しかし、実際の社会は自閉の子が生活しやすいようには、全くなっていません。無秩序な騒音が鳴り響き、けばけばしい看板が並び、無慈悲な人間の集団が、突然覗き込んだりちょっかいを出したりしてきます。轟音を上げてバイクや自動車が道路を走り、時には信号を無視していきます。もし自閉の子がその道路に飛び出し、事故を起こしそうになったら、おそらく親は、二度としないように強くしかり、スパルタ的なことしてしまうかもしれません。「…したらだめ！」という否定の言葉よりも、「…しましょう」という誘導の言葉が大切とはわかっていても、「…したらだめ！」としかなければならないとき

もある。危険に直面したわが子の前に、自閉の子に向けた社会ができるのを待っている余裕はないのです。社会が変わる前に、社会にあわせて最低限のことができる子を育てないと、自閉の子は生きてはいけません。

ジャーナリストの目から見ると、確かに最大の問題は、自閉症の人に寄り添わない社会制度の不備にあります。しかし現実には、目の前の問題を解決するために、折り合いをつけるしかないのも事実です。なんと不条理な世界。将来の社会変革を夢見ながらも、私は最近、自閉の子の心を傷つけず、うまい具合にとりあえず社会と折り合いをつけていく、未来型のシステムがないものかと、考えるようになってきました。



室山 哲也 (学園アドバイザーボード、NHK解説委員)

このコラムは4回シリーズでお届けします。

療育プログラムのようす

SST教室 『友だちの顔神経衰弱』

『友だちの顔神経衰弱』は、トランプの代わりに友だちの顔写真で神経衰弱を行うゲームです。「あっ 君だ！」などと子どもたちは大盛り上がりです。順番を守り、次の友だちに「どうぞ」と言うなど、ゲームの中から学ぶことはたくさんあります。また、『すばやい行動』を行うこともSST教室の目標にしています。先生の「君を先頭に整列！」などの指示を聞き取り、すぐに行動に移せることは、特に学校生活の中では対人関係のスキルを獲得する上で基礎となる大切な部分と考えています。(大澤)



友達の顔神経衰弱

また、『すばやい行動』を行うこともSST教室の目標にしています。先生の「君を先頭に整列！」などの指示を聞き取り、すぐに行動に移せることは、特に学校生活の中では対人関係のスキルを獲得する上で基礎となる大切な部分と考えています。(大澤)

ダンス教室 基本運動の足上げ

や、ギャロップ、ツーステップなど、4月からの積み重ねで体の安定感がぐっと増しました。今年は、ダンスを通して対人関係のスキルも養えるよう、ゲームやペアでの活動を工夫し「さあ、足上げいよ〜！」しています。2人組での柔軟体操では、「おすよー」「いいよー」「いたーい」「ごめんね」「だいじょうぶ」など、楽しいやりとりが飛びかっています。ダンス教室では、いっしょに活動を楽しみたい友だち(女子)を募集しています。まだ空席がありますので、どうぞお申し込みください。(新堂)



音楽教室 歌唱・器楽・リズムの3つ

を主にして活動を行っています。幼児は、季節に合わせた歌や乗り物、動物、天気などをテーマにした歌を取り上げて、生活と音楽の結びつきを大切にしています。小学生は、「口の体操」と「発声練習」に力を入れています。リズムカルな曲に合わせて「あ・え・い・う・え・お・あ・お」と母音を中心に口を大きく動かす練習を繰り返すことで、最初は少ししか口を動かさなかった子も、回数を重ねるごとに頬を上げて大きく口を動かせるようになってきました。顔の筋肉を動かすことで、表情も生き生きとしてきています。(後藤)



口を大きく動かそう!

体育教室 体育教室は、今年も新しい活動に挑戦しています。

ミニトランポリンでは、テンポに合わせていろいろな跳び方を楽しむことで、バランス感覚や持久力の向上を目指しています。「どうぶつストレッチ」は、動物の特徴がストレッチの動作としてイメージしやすく、子どもたちの取り組みが良好です。体は、成長と共に自然と柔軟性が失われていくそうです。早い時期からストレッチを生活の中に取り入れ、いつまでも動きやすい体を維持できるとよいですね。(鈴木)



みごとなアザラシのポーズ



幼児 桜の花が満開の4月。初めての教室、新しい友だちや先生にドキドキだった子どもたち。大好きなお母さんを思い出して泣くこともしばしばありました。そんな時「でこぼこ～」の歌が始まると子どもたちの目は一斉に黒板へ…。気がつくとみんな笑顔に早変わり。毎回のことながら絵描き歌パワーに驚かされます。そして、ひまわりの花が咲き始める7月。「こんにちは！」「いっしょにいこう！」「できました！」教室は元気な声と笑顔で一杯になりました。そんな様子を見ていると「自分でできること」が少しずつ増えてきたことを感じます。真っ黒に日焼けした9月にはまた大きく成長している姿を見せてくれることでしょう。今から楽しみです。どうぞ、すてきな夏休みを！（本田）



幼児「でこぼこ、でこぼこ～」

1年生 「おはようございます」「先生、今日もブロック体操する」などと教室には元気いっぱいの声が響きわたっています。算数は、10まで数の数列や大小、合成・分解にじっくりと取り組み、今は足し算に挑戦中です。国語は、ひらがなに少しでも興味が持てるよう、「ま」と小さな「っ」が入ると「まっ」とになるなど文字と絵カードを使用して楽しく拗音と促音を学習しました。4月から行っている音読も、みんなで声を合わせて一定のリズムで読めるようになってきました。（高橋）



1年 みんなの好きなブロック体操

2年生 国語では『スイミー』の学習をしています。音読では、みんなで声を合わせて読むことをポイントにしています。上手く合わせるためには友だちや先生の声に耳を傾けて、よく聴くことが大切です。音読の後は、ペープサートなどで物語のあらすじを確認しました。文章ではわかりにくかったことも、絵があればよくわかります。音楽の時間には、鍵盤ハーモニカで『かっこう』を練習しています。ここでもポイントは、みんなで合わせて演奏すること。回数を重ねるごとに少しずつ音がそろってきているように感じます。（大澤）



2年 スイミーの学習

3年生 学年が一つ上がって4ヶ月が経ち、「3年生」としての姿が様になってきました。得意な問題にも苦手な問題にも、友だちと共に一生懸命向き合っています。国語では、説明文『ありの行列』に取り組み、音読や読解問題を繰り返し行いました。挿絵を見てどのような場面であったか、キーワードを用いて答えられる姿もあり、内容をよく理解できたことを実感しました。また、粘土でありを製作し、全員で並べて行列にしてみたりもしました。手際よく製作を進められる姿にも、今まで積み上げてきた成果がうかがえます。（北川）



3年「集中しています！」



4年 コンパスを使って製作したこま

4年生 国語の学習では「聞いて書こう」という学習を行っています。担当者が読んだ文章(100文字程度)の聞き書きや、読んだ内容に関する質問に答える練習をしています。文章を書くスピードが上がり、内容を考えながら話を聞くようになってきました。算数は、電卓やコンパス、定規など、道具を使った学習に取り組んできました。8桁くらいの数字をよく見て電卓を押したり答えを書き込んだり、コンパスや定規の使い方もとても上手になりました。これからも、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。（宮下）



5・6年・中「ぼくの発表を始めます」

5・6年生・中学生 ローマ字の学習を発展させた「コンピュータ学習」、お金の学習としての「お小遣い帳の作成」、また、粘土べらを使用してカッターの使い方の基礎学習を行うなど、教科学習に加えて体験学習的な要素を取り入れています。また、昨年に引き続き「発表」（学校や家庭での様子を友だちの前で発表する活動）を行っています。その際、友だちの発表内容を「いつ」「どこ」「だれ」「なにを」などの項目ごとにメモを取る練習をしています。メモしたことを活用して質問ができるようになりました。（藤本）



コンピュータ タイピング練習

コンピュータ教室 タイピングソフトを使って単語や文章の入力練習を行っています。それぞれの指に色をつけた手袋を使用することで、正しい指使いができるようになった子どもが増えました。タイピング練習のみではなく、「ペイント」を使用しているマウスの操作方法の確認、「デジタルカメラ」の撮影の仕方、「インターネット」を利用して全国の天気や折り紙の作成方法を検索することも行っています。今後は「ワード」「エクセル」などにも挑戦していく予定です。（藤本）



言語 左手でキャッチ！

言語プログラム 今年度は、年中～小6と年齢枠が広がり人数も増えました。幼児は、パソコンでの歌の動画や手遊びなどから、ことばを表現できるようにしています。小学生以上は、スリーヒントゲームで物品の手がかりを伝える練習。輪投げでは投げる・受け取る時の合図や左右の位置を、釣りゲームでは釣り上げた絵やことばに対して「あたり」「ちがう」「のとなり」などと、相手に伝えることを通して空間的な位置も覚えるようになってきました。「何やりたい」と聞くと「輪投げやりたい」と子どもたちの方から要求をするようにもなり、盛り上がっています。（計野）



自立した生活及び地域社会に受け入れられること

副所長 計野 浩一郎

「外で遊ぶことが多くなった。その分おかしなことをやっていけば、その場で注意してもらっても大切です。この子のことを少しでも理解していただければ有り難い。成長すれば学校と家だけでは済まなくなります。また、社会性を考えると、まず、身近な社会の皆様の手助けしていただかなければなりません。それには少しでも理解してもらえるように親の努力が必要です。私は、子どもの成長を願うとき私自身も成長しなければと思うようになりました。私だけでなく、こういう子どもたちの親は、人知れず情けない思いを重ねてきたと思います。また、これからも続くだろうと思いますが、放っておいてくれと開き直っては道が閉ざされてしまうような気がします。誤解される悲しみをおそれてはいけないと思います。親の内面的な成長が、子どもの成長にもつながるのだと強く感じています。」(ある保護者の記録より)

本来、日本人は信頼関係を築けば優しく、親切で、世話好きな人が多いと言われます。どんなことにもはじめの一步を踏み出す勇気をもってほしいと思っています。踏み出して初めて見えてくることは多いと思います。例えば、親が参加している趣味のサークルは、親にとって安心できる人や場所であるはずですが、それはイコール子どもたちにとっても安心できる人・場所となるはずですが、その関係の中に巻き込むことで、親がいなくても行ける楽しい場所が一つできますし、そこに

集う方々とその家族との人間関係が築けます。そして、さらにその向こうにいる人たちへとネットワークを広げていくことができます。このネットワークの広がりこそが、彼らの「生きやすさ」へとつながります。豊かな生活は地域に飛び出してこそ得られます。飛び出して安心できる人・場所でなければ再挑戦すればよいのです。そんな親の子育てしている姿をありのままに見てもらうことが、地域社会に障がいの子たちを一人の人間として知ってもらふ第一歩だと考えます。

現在の障害者施策の一つのテーマに入所施設等から地域に暮らしの場を広げる・移行するということがあげられています。また早期の批准が待たれます『障害者の権利に関する条約(仮訳文)第19条自立した生活及び地域社会に受け入れられること』に「この条約の締約国は、すべての障害者が他の者と平等の選択の機会をもって地域社会で生活する平等の権利を認めるものとし、障害者が、この権利を完全に享受し、並びに地域社会に完全に受け入れられ、及び参加することを容易にするための効果的かつ適当な措置をとる…(続く)」とあるように、障がいの有無に関係なく誰もが地域で自分らしく暮らしていけるようなコミュニティを、当事者(保護者、支援者も含む)のみの努力にゆだねるのではなく、社会全体で一緒に作っていかれたら強く思っています。

セミナーのご案内

平成22年度のセミナーを以下の通り実施いたします。まだ若干空きがございますので、ご希望の方はお早めにお申し込みください。

- 平成22年9月24日(金)10時~12時
「視知覚機能問題への支援」
築田 明教(かわばた眼科 視覚発達支援センター)
- 平成22年11月19日(金)10時~12時
「ことばの学習と心のやりとり」
三好 純太(葛西ことばのテーブル)

武蔵野東教育センター

〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-10

電話 0422-53-8585 FAX 0422-53-8595

Email: education-center@musashino-higashi.org

ホームページもご覧ください

<http://www.musashino-higashi.org>

電話教育相談のご案内

遠方の方や、来所するのが難しいという皆様のために、電話での教育相談も実施しております。

保護者勉強会のご案内

当センターのスタッフが専門性を生かして、受講者の保護者の皆さんに直接お話しさせていただく機会を設けております。平成22年度後半は以下の日程で実施いたします。

- 7月16日(金)10~12 藤本 省司「生活自立に向けて」、高橋 奈都子「家庭で取り組める音楽活動」
- 9月8日(水)10~12 大澤 徹也「知能検査を学習に活かす」、後藤 千穂「余暇としての音楽」